

金成哲氏の発表論文に対するコメント

周 貴 華*

(中国 中国社会科学院)

この論文は言語学・文献学的研究を基礎とした極めて精緻なものであり、如来蔵思想を大成した『宝性論』の「種姓 (gotra) 説」を出発点に、「種姓」の原語 gotra とその訳語を系統的に分析することによって、チベット仏教と東アジア仏教に固有の「種姓無為説」の起源が『宝性論』に対するいささか穿ちすぎた解釈、ならびに『仏性論』の思想の直接的な影響に基づくことを明らかにしようとしたものである。

具体的に論述するに当たって、『宝性論』の現存するサンスクリット原本の中にしばしば見える gotra (種姓) を、tathāgatagarbha (如来蔵、仏性)、buddhadhātu (仏性)、tathāgatadhātu (如来性、如来界)、tathatā (真如)、dharmadhātu (法界)、dharmaṭā (法性) 等と比較検討し、漢訳の『宝性論』・『仏性論』中のこれらの訳語と思われる言葉を煩を厭わずに提示し、これらの二つの論において、gotra という言葉が異なる文脈の中で「仏性」「如来性」「真如仏性」「真如性」「性」「正因」等と様々に翻訳されていることを明らかにしようとしている。金氏の考えでは、これらの訳語が事実上、gotra に対する一つの解釈であって、それに「無為」という性質を付与しており、既に『宝性論』の原本の思想を超えるもので、これによって、「種姓無為説」が前面に出てくるようになったという。

この考え方の延長線上において、金氏は、「種姓無為説」の直接の起源を、二つの脈絡—それらは決して別個のものだとは言えないのだが—に帰している。第一は、『宝性論』中の gotra が直接に「真如」と訳されており、『仏性論』ではこの意味が徹底され、更には強化されているということであり、第二は、『宝性論』中に prakṛti-stha-gotra (本性住種姓) という言葉が現れるが、『仏性論』では、これが「本性住仏性」と訳され、しかも「真如」と解されているということである。こうしたことによって、こ

*中国社会科学院哲学研究所研究員。

の二つの論が gotra を「真如」であるとする理解に導いたとし、特に『仏性論』がこれを組織的に行ったことによって、東アジア仏教において「種姓」を「無為性」と見做す思想の素地が形成されたとする。

ただ非常に奇妙なのは、gotra という語が『宝性論』や『仏性論』の中で一度も「種姓」と訳されていないことである。そのため、金氏の論文が提起し、また、現代の一部の学者が主張するような、東アジアの如来蔵思想の伝統の中で「種姓無為」の意義を論じようとする見方についても、穿ちすぎた解釈であるように思える。中国の如来蔵思想に代表される東アジアの仏教が種姓説を本当に視野に入れたかどうかという点も問題であり、高々のところ、周辺の問題であったことは疑いを入れない。しかし、インドの『宝性論』や『仏性論』のような主要な如来蔵論書の中では、非常に重要な位置を占めており、その中心的テーマの一つとなっている。

「種姓無為説」の起源について語ろうとする時、インド的視野からは、当然のことながら、インドにおける如来蔵思想と唯識思想の結合について考えざるを得ない。実際のところ、古代インドでは、唯識思想が起こると、如来蔵思想はそれと結びつき、特に弥勒や世親の著作にあっては、この二つの思想のいずれもが中心的テーマとなっている。しかし、唯識学が発展して中期ともなると、アーラヤ識説を中心とする純粹唯識思想、つまり「有為依唯識」と、心性真如説を中心とする混交唯識思想、つまり「無為依唯識思想」（「心性如来蔵思想」とも呼ばれる）の二派に分かれ、それぞれの方向に突き進んでいった。

このように見てくると、インドで「種姓無為説」が成立するにあたって大きな役割を果たしたものに二つがあったことが分かる。第一は、『如来蔵経』や『大般涅槃経』などに見るように、初期の如来蔵思想の「仏性」「如来蔵」(buddhadhātu, tathāgatadhātu) が、その恒常性と如来の内在性、造作するものではなく内在する本具のものであることを強調しており、更に、その後に出現した如来蔵経典が、「衆生性」(衆生界、sattvadhātu)、「仏性」(仏界、如来界、buddhadhātu, tathāgatadhātu)、「法界」(dharmadhātu)、「法性」(dharmaṭā) などと同じものと見做して「法性」「法界」「仏性」「如来蔵」の性質を無為的なものに改めたため、仏になる原因としての「仏性」「如来蔵」が「法性」と同一であるというコンテクストが形成されていたということである。

第二は、『弁中辺論』などのような初期の唯識学の典籍の中で、「法性」「法界」「真如」等を同体異名とし（実際には、般若思想において既にこの思想は存在した）、また、『瑜伽師地論』の「本地分」の中で、「種姓」を「界」（dhātu）や「性」（prakṛt）と見做して「法爾」（法性、dharmaṭā）であるとし、『宝性論』が、

無始時來界（dhātu）
一切法等依
由此有諸趣
及涅槃證得

という「界」の頌を新たに解釈し直すことで、元來、有為の種子や種姓、あるいはアーラヤ識であった「界」（dhātu）を、無為の如來藏（「無始世來性」の「性」、『勝鬘經』による）と理解しているように、「種姓」が「真如」「如來藏」と一つになって、無為という性格を獲得したということである。

この二つの大きな影響こそが、『宝性論』や『仏性論』が直接・間接に種姓無為説を生み出した主な思想的由来であるに相違なく、金氏やその他の学者が考えているような、ずっと後の人と考えられる解脱軍（Āryavimuktisena）の『現觀莊嚴論（釈）』の影響などではない。最後に一点だけ申し添えておきたいのは、『仏性論』の「応得因」「加行因」「円満因」は、間違いなく『瑜伽師地論』『菩薩地』の「種姓品」の「堪任性持」「加行持」「所円満大菩提持」の解釈に由来するものであり、このことは後者がその種姓論に与えた影響が直接的なものであったことを示唆しているという点である。

（翻訳担当：伊吹 敦）